東海学園大学教育研究紀要　第３号：77-85，2017

リアリティーのある模擬授業の実施方法
―「保健体育科教育法（陸上）」の授業報告―

黒須雅弘 *・木村華織 *

はじめに

教員養成課程科目における模擬授業の実施とその効果については、藤田ら（2011）が過去約 20 年間の先行研究を取り上げてまとめている [1)]。この研究では、主に模擬授業の実施方法の報告をはじめ、教師役、または生徒役を経験した学生、それぞれの立場での学習効果について触れられている。これ等の先行研究は、教員養成課程を有する各大学で開講している教育法の授業報告が多く、その内容からは各大学が試行錯誤しながら授業展開している様子が伺える。授業報告や受講者の学習効果については、その学校の地域性、また受講者の性別や運動能力などを含んだ学習者の特性などに相違があるため、扱う教材が同じであっても、同等の学習効果を確認することは難しい。しかしながら、教材研究や受講者の学習効果を継続的に比較検討し続けることは、既に公示されている新学習指導要領に沿って授業運営をする将来教員を目指す現役学生が実践学習をするためにも必要なことであろう。

過年度においては、本学教職課程の「保健体育科教育法（陸上）」にて模擬授業を導入した授業の運営用法を中心に授業報告をしてきた（黒須 2016）[2)]。本稿では、同授業における模擬授業の実施方法の報告と受講生の学習効果を中心に記す。

１．「保健体育科教育法（陸上）」について

１-１．開講状況

本科目は、スポーツ健康科学部３年生次の春学期に開講しており、教員免許状（保健体育）取得を希望する学生に対しては必須科目としている。2017 年度は、２クラス開講で各クラス異なる教員が担当した。開講時間帯で多少の受講者数の差異はあるが、44 名クラスと 52 名クラスであった。同学部１年生次を対象に開講している「スポーツ方法学実習」（以下：方法学実習）においても陸上競技を扱っているが、実技を中心に実践的に方法論を学ぶ方法学実習に対して、「保健体育科教育法（陸上）」（以下：教育法）の授業では、受講生が模擬授業を行い体育実技授業の運営、指導方法を学習する（表 1）。

表１：陸上競技を扱う教職課程科目（2015 年度入学生用）

科目名	開講年次（年度）	学習内容
スポーツ方法学実習（陸上Ⅰ）	１年生次（2015）	短距離走・ハードル走・跳躍種目の実践
スポーツ方法学実習（陸上Ⅱ）	１年生次（2015）	リレー・跳躍種目・投擲種目の実践
保健体育科教育法（陸上）	３年生次（2017）	学習指導案の立案、作成。模擬授業を通じた指導実践。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

1-2．授業の展開方法

本授業では、模擬授業を中心に授業を展開するため、受講生は教師役と生徒役に分かれて毎時間の授業を受講した。模擬授業の展開方法を以下に記す。

① 教師役学生

模擬授業を担当する学生は、「導入」または「展開Ⅰ・Ⅱ」の学習指導案を担当週の1週間前迄に担当教員に提出した。提出された学習指導案の内容によっては、必要に応じて担当教員が指導し、再提出と指導を繰り返すこともあった。学習指導案の様式は、本授業用に作成したものを使用した（資料1）。

模擬授業の学習課題は、陸上競技の各種目の技術を学習させることを目的とする指導内容とした（資料2）。

② 生徒役学生

過年度と同様、生徒役の学生は、教師役学生が実施した模擬授業に対して、所定の評価票を用いて4段階評価と自由記述により評価した（資料3）。

③ 担当教員

模擬授業中、本科目の担当教員は、各グループの模擬授業の巡視をしながら、教師役学生の指導方法の評価を行った。主な評価内容は表2に示す通りである。

授業終了時には模擬授業の講評として、学習指導要領に沿った教材の扱い方や専門技術の指導方法について見本実技を交えながら解説した。

表2：模擬授業の評価項目

模擬授業の評価項目
a. 時間内で授業が展開できているか
b. 十分な声量、適切な言葉づかいで指導ができているか
c. 生徒や見やすい、分かりやすい見本実技を示し、生徒の理解を確認しながら指導をしているか
d. 学習指導案に沿った授業進行になっているか。
e. 生徒の能力や経過時間、施設状況、天候の変化などに応じて、指導案を変更するなど臨機応変に対応できているか。
f. 安全に留意した用器具の利用、場所の確保、運動指導ができているか。

2．模擬授業の実践方法

本授業で行った模擬授業は、白石（2013）の授業実践報告を参考にした上で、受講者数や受講生の学習経験にあわせて運用した。2017年度は、2016年度の実施方法に倣って模擬授業の種目を設定した。

① 学習過程別の模擬授業

学習過程別の模擬授業は、中学･高等学校の授業時間に倣って45分間に設定し、「導入」･「展開Ⅰ」･「展開Ⅱ」の学習過程で構成した（表3）[3)]。各学習過程は15分間に設定し、それぞれ1名の学生が担当する。したがって、毎授業1名の学生が模擬授業を行うのではなく、1回（90分間）の授業内で各グループ3名の学生が教師役として模擬授業を行った（表3）。

表 3：「保健体育科教育法（陸上）」模擬授業の構成（例：第 1 時限目の場合）

<table>
<tr><th>授業進行</th><th>担当者</th><th>段階（学習過程）</th><th>内容</th></tr>
<tr><td rowspan="7">9:00～9:10
・模擬授業担当者の確認.
・模擬授業担当者から各グループ内の生徒役学生へ学習指導案の配布.

9:15～10:10
・模擬授業開始.
・模擬授業の巡視,評価.</td><td>教師役学生A</td><td>【導入：15分間】
9:15～9:30</td><td>・集合,整列,挨拶,出欠確認,体調把握.
・本時の流れを説明.
・準備運動（ウォーミングアップ）</td></tr>
<tr><td colspan="3">（約5分間）生徒役の学生が模擬授業の評価をする.教師役学生Bの授業準備.</td></tr>
<tr><td>教師役学生B</td><td>【展開I：15分間】
9:35～9:50</td><td>・各種目の指導,デモンストレーション.
・最後は,まとめ・評価をして終了する.</td></tr>
<tr><td colspan="3">（約5分間）生徒役の学生が模擬授業の評価をする.教師役学生Cの授業準備.</td></tr>
<tr><td>教師役学生C</td><td>【展開II：15分間】
9:55～10:10</td><td>【展開I】と同様.</td></tr>
<tr><td colspan="3">（約5分間）生徒役の学生が模擬授業の評価をする.</td></tr>
<tr><td>10:15～10:30
・講評</td><td colspan="3">授業担当者による模擬授業担当者に対する評価.授業展開や扱った教材内容の指導方法などに関する指導.</td></tr>
</table>

② 授業時間を延ばしたグループ別担当の模擬授業

「① 学習過程（段階：導入・展開Ⅰ / Ⅱ）別の模擬授業」では、全ての学生が授業内における各過程の学習指導案を作成し、指導実践を担当した。しかしながら、「導入」・「展開Ⅰ」・「展開Ⅱ」の各過程のどれを担当しても、1 人当たりの指導時間が 15 分間と限定されていたため、教師役学生が指導実践を踏む機会としては物足りなさが見受けられた。

そこで 2017 年度では、はじめの 2 回の模擬授業を 2016 年度同様、「導入」または「展開Ⅰ・Ⅱ」を担当し、3 回目の模擬授業に限っては、1 グループ 3 名編成で 55 分間の授業を担当する形式を試みた（表 4 - 1）。55 分間の模擬授業における学習段階（導入、展開、まとめ）に費やす時間配分は各グループの任意によるものとした。扱う学習課題は、授業担当教員から事前に指示された種目を担当し、具体的な学習課題や授業の目標、学習活動については、教師役学生たちが独自に計画した（表 4-2）。学習指導案は、グループで 1 枚、55 分間の授業を完結させる内容を作成した。

表 4 - 1：2016 年度と 2017 年度の模擬授業実施方法

	2016 年度	2017 年度
模擬授業回数	各学生 3 回	各学生 3 回
指導時間	・15 分間 / 教師役学生	・15 分間 / 教師役学生 ・ 2 回のみ 2016 年度と同じ ・ 3 回目は、グループが 55 分間の授業を担当
指導対象者数	生徒役 12 ～ 15 名	生徒役 10 ～ 22 名
担当内容	導入・展開Ⅰ / 展開Ⅱのいずれか	導入・展開Ⅰ / 展開Ⅱのいずれか

表 4 - 2：教師役学生 3 名による 55 分間の模擬授業

				授業時間 55 分	
週	期 日	グループ	教師役学生 ID	内容（回）	実施方法
12	6 月 28 日 陸上競技場	A	5 6 7	走り高跳び　1/2	「導入・展開Ⅰ・展開Ⅱ」各段階の時間配分や時案の目標設定、学習内容は教師役学生が学習指導要領に沿って独自に計画する。
		B	5 6 7	ハードル走　1/2	
		C	5 6 7	短距離走　1/2	
		D	5 6 7	リレー　1/2	
13	7 月 5 日 陸上競技場	A	8 9 10	走り高跳び　2/2	
		B	8 9 10	ハードル走　2/2	
		C	8 9 10	短距離走　2/2	
		D	8 9 10	リレー　2/2	
14	7 月 12 日 陸上競技場	A	11 1 2	リレー　1/2	
		B	11 1 2	ジャベリック　1/2	
		C	11 1 2	走高跳　1/2	
		D	11 1 2	走幅跳　1/2	
15	7 月 19 日 陸上競技場	A	3 4	リレー　2/2	
		B	3 4	ジャベリック　2/2	
		C	3 4	走高跳　2/2	
		D	3 4	走幅跳　2/2	

③ 生徒役学生を増やした模擬授業

2017 年度も過年度に倣った模擬授業を実施する予定だったが、リアリティーに欠けた授業環境を改善するために、②に示したように授業時間を延長した。また、教師役学生の負担を軽減するためにグループによる授業実践を実施した。それでも準備不足の学生が同グループ内の他の学生に全て任せっきりの状態が見られたり、導入から展開へつながりの無い学習活動になってしまったりしていた。

担当時間を延ばす条件に加えて、生徒役学生の数を増やすことで、より現場に近い授業環境下で授業実践ができる方策を試みた。

そこで、今回の授業においては、過去 3 回までの模擬授業を通じて、担当教員と学生間の評価が高かった学生 2 名に対して、20 名の生徒役学生を相手に 15 分間の模擬授業を課した。扱う教材は、教師役学生の得意種目を選択させ、授業内容についても任せることとした。1 名がハードル、もう 1 名がリレーを選択した。この 2 名の模擬授業実践報告書によると対象者が増えたことによる指導の難しさが挙げられながらも、初回から 3 回目までの模擬授業とは異なる実施方法を経験したことによるポジティブな感想が読み取ることができた（表 5）。

表 5：教師役学生を担当した報告書

4 回目　　担当単元：リレー
今回の模擬授業は、5 回もやる機会があって合っているのか不安な物を人に伝えることだったので毎回自信をもって指導できなかった。だけどほかの人より多く指導する機会があったし、20 人くらいの規模の指導もできたのでいい経験になった。改めて授業をしていく中で、陸上について知らないなと思った。だけど、知らないと教えられないし、もっと陸上について知っていかなければいけないなと感じた。また、私は、言葉で伝えることが苦手なので、説明する練習もしなければいけないなと感じた。人の授業を受けていて、褒めてくれたり、わからないこと、違うところを丁寧に指導してくれると頑張ろうと思えるなと感じたのと雰囲気も大切だなと感じたのでそういうところも気をつけて指導できるようになる。先生から話を聞かせようとするところがよかったと言ってもらえたので、そこは変わらずにやっていく。陸上の体育科教育法は終わってしまったけど指導する点では変わらないので、他の競技にも活かしていく。

4 回目　　担当単元：ハードル走
いつもよりも人数が多い中授業をしてとても難しいと感じました。人数が多いとみんな勝手に友達と話し始めたりして話を全く聞いてくれませんでした。またほかのところで楽しそうなことをしていればみんなそっちのほうに意識が行ってしまいまとめることが大変で、一人ひとりの動きをチェックしアドバイスすることもあまりできませんでした。そんな中授業をして生徒たちが授業に集中してくれる授業内容や楽しい授業内容を考えておかなければならないと思いました。授業内容が充実させることによって友達同士で話したりすることがなくなるのではないかと思うし、生徒たちが集中して授業をしてくれると感じました。本当の授業ではさらに 20 人加わるのでもっと大変な事になると思いますが今回多い人数で授業を行えたことは自分にとっていい経験になりました。

３．今後の課題

３-１．模擬授業の実施方法と学習効果

本年度は、模擬授業の実施方法を３つ設けて授業を展開した。模擬授業を導入した授業運用自体は、初年度に比べると円滑な授業進行になっている。当初の準備作業に費やす労力と比較すると年々効率良く授業運営はできているが、受講者の学習効果に関しては未だ確認することができていない。

生徒役学生が評価する４件法を用いた評価表（資料３）を見る限り、初回の模擬授業から２回目の評価結果を比較しても評価点に顕著な差が見られないのは、生徒役学生の授業評価をするための観察力が乏しいのか、または回数を重ねても改善されない教師役学生の模擬授業自体に問題があるのか、確たる答えが見えてこない。全学生の評価点を統計的に評価項目別に分析をする作業が行えていないため、今後、学生間の評価結果を分析する必要はあるであろう。

３-２．「保健体育科教育法」の学習内容

本学における陸上競技を扱う教職系科目は、実技実践の「方法学実習」と指導実践を中心とした「教育法」に大別されている。

１年生次に開講している「スポーツ方法学実習（陸上Ⅰ・Ⅱ）」では、短距離走、リレー、ハードル走、砲丸投、ジャベリック投げ、走高跳、走幅跳など「走・跳・投」の動作様式を全て網羅した種目を 30 コマ（90 分 / コマ）分の授業に取り入れている。

「教育法」では、１年生次で受講した方法学実習の経験を活かしながら、競技ではなく授業教材としての陸上競技をどのように指導していくのかについて、授業計画、および実技指導（模擬授業）の方法を学習する。しかしながら、各種目の実施方法は分かっていても、段階的に授業計画を立案することに苦戦している学生が多く見られた。例えば、ハードル走やリレー種目を授業教材として扱うことによって、単元終了時には受講者に何を学ばせたいのか具体的な学習目標が立案できていないため、生徒役学生に対して等間隔に並べたハードルを繰り返し跳ばせたり、バトンの受け渡し区間を設定しないリレーを実施するなど“ただ行わせた”だけの活動内容になっていた。

模擬授業の準備に際して、学習指導案の作成、またそのための教材研究の必要性が再確認できた。

まとめ

新学習指導要領が告知され、「主体的・対話的・深い学び」に重きを置いた新しい授業形態が求められることになった。保健体育の授業は、自らの身体活動から身体の構造や他者理解などについて学ぶ絶好の機会でもある。また、器具を用いない身体活動を主とした陸上競技は「走・跳・投」の動作様式を体験しながら自らの身体の動きを感じることができる最高の学習ツールであろう。

陸上競技を扱った模擬授業の実践学習は、準備に準備を重ねた教材研究から指導方法や学習活動が生まれると考えられる。今後、「教育法」では、競技の専門性やルールに捉われない発想から生まれる走る楽しみやバーを越えた達成感、バトンを繋ぐ協調性などを体感できる教材をつくれる能力を養えるような授業展開を目指していきたい。

≪引用・参考文献≫

1）藤田育郎，岡出美則，長谷川悦示，三木ひろみ　教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討－授業の「省察」に着目して－体育科教育学研究 27-1：19-30. 2011.3

2）黒須雅弘，木村華織　体育授業（陸上競技）づくりの実践学習－「保健体育科教育法（陸上）」の授業報告－東海学園大学教育研究紀要第 2 号：72-77. 2016

3）白石晃　教員養成教育における模擬授業の取り組み－「保健体育科指導法 2」の授業実践から－天理大学学報 233：99-123. 2013

資料1：学習指導案

2017保健体育科教育法（陸上）

学　習　指　導　案

班-ID	－	学籍番号	S114	学生氏名	

単元（運動種目）	時間分の　　時間目を想定	内容	

日時	平成　　年　　月　　日（　　）　　時限目	場所	

対象	中学生・高校生（男子20名・女子20名　合計40名）を想定する。

本時の目標（指導観を含む）	

段階・過程	時間（分）	生徒の学習活動（具体的な内容）	指導上の留意点（指導や支援）	
			指導や支援	評価規準

準備物（用器具・教具，数など）

※テンプレートはA3サイズに印刷して提出．

資料2：模擬授業の学習課題と担当者の予定表

保健体育科教育法（陸上） 水1（黒須）

模擬授業単元別（学習内容別）担当表

			導入		展開Ⅰ			展開Ⅱ		
WK	期日	G	ID	内容	ID	内容		ID	内容	
1	4月26日	A	1	導入(集合・点呼・準備運動)	2	ハードル①	抜き脚・リード脚	3	ハードル②	スタート～1台目
		B	1	導入	2	リレー①	リレーの基本	3	リレー②	バトンパス
	陸上競技場	C	1	導入	2	ハードル①	抜き脚・リード脚	3	ハードル②	スタート～1台目
		D	1	導入	2	リレー①	リレーの基本	3	リレー②	バトンパス
2	5月3日	A	4	導入(集合・点呼・準備運動)	5	ハードル③	3歩リズムの維持	6	ハードル④	課題練習
		B	4	導入	5	リレー②	バトンパス	6	リレー③	ゴーマーク設定
	陸上競技場	C	4	導入	5	ハードル②	スタート～1台目	6	ハードル③	3歩リズムの維持
		D	4	導入	5	リレー②	バトンパス	6	リレー③	ゴーマーク設定
3	5月10日	A	7	導入(集合・点呼・準備運動)	8	ハードル④	課題練習	9	ハードル⑤	測定
		B	7	導入	8	リレー③	ゴーマーク設定	9	リレー④	課題練習
	陸上競技場	C	7	導入	8	ハードル④	課題練習	9	ハードル⑤	測定
		D	7	導入	8	リレー③	ゴーマーク設定	9	リレー④	課題練習
4	5月17日	A	10	導入(集合・点呼・準備運動)	11	走幅跳①	実測測定	1	走幅跳②	ジャンプ
		B	10	導入	11	リレー④	課題練習	1	リレー⑤	測定
	陸上競技場	C	10	導入	11	走幅跳①	実測測定	1	走幅跳②	ジャンプ
		D	10	導入	11	リレー④	課題練習	1	リレー⑤	競争・測定
5	5月24日	A	2	導入(集合・点呼・準備運動)	3	走幅跳③	助走	4	走り幅跳④	測定
		B	2	導入	3	砲丸投①	立ち投げでの突き出し	4	砲丸投②	サイドステップ投げ
	陸上競技場	C	2	導入	3	走り幅跳③	助走	4	走幅跳④	測定
		D	2	導入	3	砲丸投①	立ち投げでの突き出し	4	砲丸投②	サイドステップ投げ
6	5月31日	A	5	導入(集合・点呼・準備運動)	6	リレー①	リレーの基本	7	リレー②	バトンパス
		B	5	導入	6	砲丸投③	グライド投げ	7	砲丸投④	課題練習
	陸上競技場	C	5	導入	6	リレー①	リレーの基本	7	リレー②	バトンパス
		D	5	導入	6	砲丸投③	グライド投げ	7	砲丸投④	課題練習
7	6月7日	A	8	導入(集合・点呼・準備運動)	9	リレー③	ゴーマーク設定	10	リレー④	課題練習
		B	8	導入	9	砲丸投④	課題練習	10	砲丸投⑤	測定
	陸上競技場	C	8	導入	9	リレー③	ゴーマーク設定	10	リレー④	課題練習
		D	8	導入	9	砲丸投④	課題練習	10	砲丸投⑤	測定
8	6月14日	A	11	導入(集合・点呼・準備運動)	教材研究 ・砲丸投（授業運用，技術的指導の実践など） ・走高跳（導入から正面跳び，はさみ跳び，助走角度の必要性について．）					
		B	11	導入						
	陸上競技場	C	11	導入						
		D	11	導入						
9	6月21日	A	2	導入(集合・点呼・準備運動)	3	走幅跳③	助走	4	走り幅跳④	測定
	5/24の担当者分を実施.	B	2	導入	3	砲丸投①	立ち投げでの突き出し	4	砲丸投②	サイドステップ投げ
	陸上競技場	C	2	導入	3	走り幅跳③	助走	4	走幅跳④	測定
		D	2	導入	3	砲丸投①	立ち投げでの突き出し	4	砲丸投②	サイドステップ投げ

資料3: 模擬授業評価票

保健体育科教育法(陸上)　模擬授業評価票

班-ID	-

2017年　　月　　日

学籍番号		氏名	

※この調査は、授業改善に役立つ情報を得るためのものです。ありのままに答えてください。今日の授業を振り返って、次の項目に当てはまる数値を〇で囲んでください。

教師氏名	

		全く当てはまらない	当てはまらない	当てはまる	大変よく当てはまる
1	適度な声の大きさで、分かりやすい説明、的確な指示がなされていた。	1	2	3	4
2	安全に配慮した授業展開がなされていた。	1	2	3	4
3	ホイッスルは、必要に応じて適切に吹くことができていた。	1	2	3	4
4	場面転換がスムーズに行われ、不用な待機時間が少なかった。	1	2	3	4
5	評価基準に基づいた学習者(生徒)への評価ができていた。	1	2	3	4
6	上記(5.)の評価に対する助言(アドバイス)ができていた。	1	2	3	4
7	「何を習得させたいのか」授業のねらいと道筋が明確であった。	1	2	3	4
8	指導案はわかりやすく、丁寧に書かれていた。	1	2	3	4
9	状況に応じて、指導案の内容を修正することができた。	1	2	3	4
10	運動量の確保が十分になされていた。	1	2	3	4

【授業の感想】上記の評価観点をもとに、具体的に評価をしてください。